

意外と知らない！？福岡の発展秘話を絵本にしちゃいました。



こんにちは！コレクティブふくおか+事務局です。

コレクティブふくおか+の「身近な文化」チームが、社会課題の解決に向けて取り組んでいる福岡テンジン大学の学長岩永さんにインタビューした内容を記事にまとめてくれました。ぜひ、ご一読ください。

みなさんは福岡の街の歴史についてどれくらい知っていますか？「歴史なんて知らなくても別に・・・」「歴史ってなんかハードルが高いよな」「県外から来たし、福岡の歴史なんてわからない」と考える方も多いと思います。では、もし、福岡の長い歴史を簡単に知ることができたら、街をより好きになれるはず！

歴史を知るって、最初の一步が難しいですね。どんなものを使って知ればいいのかわからないし、そもそも何を調べればいいのか、わからない。そんな方も多いのではないかと思います。しかし、今回福岡テンジン大学・学長の岩永真一さんにお話をお伺いして、“こんなに気軽に歴史に触れることができるんだ！”と感じました。なぜそう思えたのかというと、実は、福岡をテーマにした子ども向けの歴史の絵本があるんです！子ども向けの絵本ではありますが、大人も知らなかった福岡の歴史がたっぷり含まれています。

今回はその絵本を制作された福岡テンジン大学の学長でもある、岩永真一さんに、はるこ・OKAWARI KUN・エポニーヌの3人がお話をお伺いしました。



■絵本の制作発起人、岩永真一さんの生い立ち

そもそも、岩永さんが学長を務める福岡テンジン大学とは、2010年に開校した生涯学習の提供を行う、特定非営利活動法人(NPO法人)です。キャンパスは「街」全体。月に2回授業を行っており誰もが生徒、そして先生になることができます。入学金・偏差値は不要で、年齢も問わない大学です。

岩永さんは、早良区出身という生粋の福岡市民。なぜ福岡テンジン大学を創立したのでしょうか。

岩永さん「大学卒業前にグリーンバードというゴミ拾いの団体に出会って、天神のゴミ拾いをずっと続けてたんです。ゴミ拾いを行う中で、天神という街についてたくさん知ることができました。これがきっかけで天神の街について何か活動したいという気持ちが芽生えてきたんです。そうこうしてるうちに、WeLove天神協議会という天神の街づくり団体が立ち上がりました。そこから声がかかって、一緒に街づくりやりましょうと言われて、それ以来ずっと関わってます。

これもたまたまですけど、東京のグリーンバードを最初に立ち上げた方がシブヤ大学を立ち上げて。それを聞いていたので、福岡でテンジン大学ってあり得るのかな？って周りに聞いて回っていました。その後、いざ仕事を辞めて“福岡テンジン大学”をやろうかなというときに、当時の市民局の課長さんがチラシを持ってきて、共働事業提案制度っていうのを作ったんですけど、なんか提案しませんかと声をかけてくれたんです。じゃあ、福岡テンジン大学を提案してみますということになり、始まったのが福岡テンジン大学なんです。」

偶然が重なったことからスタートした福岡テンジン大学。絵本制作のきっかけとなる出来事は、福岡テンジン大学の授業に参加した生徒からの言葉がきっかけでした。

岩永さん「元々、福岡テンジン大学で歴史の授業を何回かやっていたんですね。2010年の10月か11月に歴史の授業をやりたいと思って、僕が企画者で歴史の授業をやったんです。内容は黒田家の古文書、黒田家の武士の誰かが書いた日記がちよこちよに残っていて、そういったものを解読するボランティアグループとして高齢の方々がやってらっしゃる“黒田家の古文書を読む会”があったんです。

たまたまその会に所属する方と知り合って、面白い活動だと感じたので福岡テンジン大学のみんなにも知って欲しいなと思って授業にしました。その時のタイトルが『黒田家の古文書を読もう』というようなものだったんですけど、若者の参加者の多い福岡テンジン大学の授業にご高齢の男性の方ばかりが来ちゃって。本当は、年齢や性別に関係なく、例えば若い女性の方にも知ってほしかったんですけど。

その時の反省点はタイトルだろうなあと考えたんです。それ以降、企画する歴史の街歩きの授業に関しては、歴史というものをストレートに謳わずに、パワースポットとかタイムスリップとか言葉を変えて、若い女性も来てくれるタイトルにしました。この工夫が実り、授業には女性の方も参加する機会が増えた頃、何度も歴史に関係する授業に来てくれた30代のママさんから「子どもに福岡の歴史を教えたいんだけど、絵本のようなものはないですか」と言われたんです。ないことを知っていたので、ないんですと答えました。僕が立ち上げた歴史サークルに所属している福岡市役所の歴史を専門としている方に聞いても、やっぱりなかったんです。実は、福岡の歴史の絵本がない理由って、福岡の歴史が膨大だからなんです。京都よりも1000年くらい古くて、ものすごい量なんです。当時の僕は“ないなら作った方が早い”と半分冗談で言っていたのですが、思いの外、周りの人がこの話に乗っかってきたんです。そして話し合いが進められ、福岡市の共働事業提案制度に提案したらどうか、もしくはクラウドファンディングはどうか、と二つの案が出ました。福岡市内の小学校の図書室に置きたいということが一番の目的として、福岡市の制度に提案することになりました。結果それが採択されて、絵本制作が実現したんです。」

ちなみにそのお母さんは福岡出身ではなく、県外出身だそうです。歴史が好きで福岡テンジン大学の授業に参加し、自分の知ったことを娘にも教えたいという母の想いが繋いだ絵本の制作。

ただ、絵本の制作は苦難の道のりだったようです。

■描きたいことが多すぎる・絵本製作のウラ話

いよいよ絵本の製作がスタート！制作メンバーは岩永さん、提案したお母さん、福岡市の方と、出版関係の方はいなかったそうです。実際に絵本を制作する過程で重要視した点はどんなものだったのでしょうか。

岩永さん「2つありました。1つは何の歴史を扱うかという編集作業であり、もう1つは絵本として伝えやすいかどうかという点でした。そもそも歴史を学校で習うのが小学5年生からで、地域の文化というようなことは小学3年生から習うんですよ。もっと小さい子どもたちを対象にした絵本を作りたいのに、歴史という自分が生まれるよりもはるか昔のことをどう伝えればいいのかという難しさと、膨大な歴史のどこを編集してまとめるかという、2つの難題が最初の壁でした。掲載する歴史事項は取り上げたいものを並べて優先順位をつけていきましたね。そのほかに漢字が使えない、表現にも制限がある、ストーリーはどうするかということもみんなで頭を悩ませた課題でした。」

確かに歴史をまだ習ったこともない子ども向けに“歴史の絵本”を作るなんてとても難しいことですよ。ストーリーや絵はどのようにして決めたのでしょうか。

岩永さん「ストーリーは企画やライティングの経験があったので、僕の脚本が通りました。内容は地下鉄の姪浜駅から博多駅行きの電車に乗って、トンネルに入ると主人公が寝落ちしてしまう。そこからタイムトラベルして、最後に起きると実は夢だったというオチのストーリーにしました。電車に乗って、時代を駅の様子に動いていく構成になっています。起承転結には気を付けましたね。紙芝居みたいにただ絵があって、ちょっと説明書きが載っているみたいな絵本では面白くないですから。

絵に関しては、参考文献や資料があったり、史跡になっているものはまだイメージがしやすいんです。でも何も残っていない歴史事項も結構あるんですよ。当時の資料が絵として残っていないので、そこをどうイメージさせるかも非常に難しく。しかも、ストーリーと連動させないといけないので悩みました。また、絵本を作

るメンバーそれぞれが歴史好きで、こだわりがあったので場面選定には手間がかかりました。単純にページ数には限りがありますし、予算の都合もあったので削ってしまった場面も多くて。僕が最もこだわったのは西区の吉武というところにある、三種の神器が出土した日本最古の王様の墓ですね。みんなに知られていないので僕は取り上げたかったのですが、泣く泣く削除しました。」最初は50場面ほどあったそうですが、最終的に選ばれたのは13場面。場面選定は大きな山場の1つだったと岩永さんもおっしゃっていました。

また、注目して欲しいポイントは鴻臚館にトイレがあったことが確実に分かっていること！鴻臚館とは飛鳥時代に設置された迎賓館で、中国大陸や朝鮮半島からの使節団を接待する場として設けられた施設。京都や大阪にも同じ施設はあったそうですが、国指定の史跡になっているのはこの福岡市にある鴻臚館のみだそうです。

では、なぜ確実にトイレがあったと言えるのか。それは、鴻臚館では海外の人が食べたであろうものが成分として現れていたから。当時、福岡に住んでいた人たちが排泄していた遺跡は鴻臚館とは別にあり、そこに現れる成分とは異なるものが鴻臚館には現れるんです。ちなみに当時は紙がなかったので、木簡の使用済みの物で拭いていたそうです。注目して欲しいポイントがもう1つあります。それは、博多の街の様子が描かれた絵です。当初は全く違う家の絵にしていたところ、福岡市の方から当時の博多の町屋はうなぎの寝床みたいに道路に面して奥行きがあったと指摘が。忠実に再現するべく、町屋を1個1個縦長に変更したそうです。絵本に対する熱い思いが1コマからでも伺えました。

■制作後の反響と広がり

様々な苦労を越えて完成した絵本。その反響は？

岩永さん「最初に作ったのは1,000部くらいで、市内のすべての小学校に配布したのと、希望があった100館の公民館にも配りました。支援金を出してくださった方にはそれぞれ1冊ずつプレゼントしています。150冊くらいは余ったので、博物館にて期間限定で販売し、1ヶ月あまりで完売しました。博物館の売店の方にはベストセラーより売れてますと言われて、売り上げは全て博物館に寄付させて頂きました。その時は新聞やテレビで紹介されまして、市内の小学校でもチラシを配布しましたね(5万部を1、2、3年生に)。」

たったの1ヶ月でそんなに！反響が大きかったことが伺えます。

また、完成後、実際に子どもたちの前で絵本の読み聞かせを行ったのだとか。

岩永さん「一回だけ福岡市博物館のラボで読み聞かせもしました。10名程度の子もたちを相手に一日で3回の読み聞かせを行いました。親御さんたちからは私たちの知らない歴史があるんですねなどの言葉を頂けて。親が楽しんでこの絵本を読めば、子どもたちにも伝わっているでしょうし、絵本に出てくる史跡などに興味を持ったなら足を運べるように絵本の後ろの方に施設の案内もつけてあります。」

そして、完成から約4年経った今でも、こんな反響があるそうです。

岩永さん「他の市町村などからたまに問い合わせをいただくことがあるんです。福岡市と共働で作ったこともあって、他の市町村には置いてないんですよ。たまたまTwitterで教えてもらったんですが、去年あたり福岡教育大学付属小学校でこの絵本を題材にした劇を上演したそうです。他には、福岡市科学館の図書館でこの絵本をみつけた女の子が気に入ってその子の母親から、絵本のおかげで娘と史跡巡りなどをして楽しめたとお便りを頂いたこともありました。」

劇ができるなんて教科書レベルですね！！苦労して作成した絵本の影響が今も続いていることに、岩永さんも嬉しそうな表情でした。

■今も引き継がれる福岡のまちとひと

一人の生徒の声から生まれたこの絵本制作のプロジェクト。制作する過程で苦しみもありましたが、絵本は子どもや学校そして、大人にまで影響を残す形になりました。また、この絵本の強みは何よりわたしたち達の街が舞台となっていることです。子ども達にとって絵本に登場した場所に足を運べることは、他の絵本にはできない経験となることでしょう。また、大人にとっては新たな福岡の知識を得ることにより、住む街の見方が変わってくるのではないのかと思います。

岩永さんには現代の福岡の文化についても語っていただいたところ、こんな話が。

岩永さん「福岡って大都市の中でも人口が流動的な街なんです。住民票を移して10年未満ですっていう人が半分くらいいます。160万人いて80万人は10年以内に住み始めたという。でも大半の人が福岡を好きって言えるんですよ。これは異常なことですが、その理由は他県から来た人ほど福岡いいよねって周りに言ってるんです。もともと住んでる人はこれが普通だからあまり言わないけど移り住んできた人が言ってる。これがずっと続いているんです。後は交通事情の関係もあるのか終電などを気にせずお酒を飲めるところがある。これも他の街にはないですね。福岡の人とか下手したら3時4時とかまで飲んじゃうので。1時2時はけっこうみんな平気なんですよ。これも記述に残ってる歴史的なことなんです。600年ぐらい前の朝鮮使節団が博多に寄って京の室町幕府の将軍に会いにいってるんですが、博多ほど連日連夜お酒を飲まされ歓迎してくれたところではなかったと書いてるんです。600年前とやっけることが変わらないんですよ。その他にも、非日常的なことが起きたらお祭りっぽくなるところがありますよね。天神ビックバンとか再開発にいちいち名前つけないのが普通ですが、福岡だけついているのはこれも一種のお祭りのようなものとして捉えていて、すごいなと思います。誰も言わなくても勝手にそうなるのが福岡の文化なんだろうな。」

呑みの文化が600年前から続いているなんてさすが、福岡。文化や歴史という一見私たちには遠い存在に感じますが、実は身近にあり、起こっていることを感じました。陥没事故も天神ビックバンも未来では、語り継がれる福岡の歴史の一部となっているのかもしれない。

■インタビューをしてみても

わたし(はるこ)は鹿児島から福岡に移り住んでから、5年が経ちます。岩永さんのインタビューの中でもお話頂いたように、すっかり福岡を好きになった県外出身者です。5年も住んだことで福岡にも詳しくなれたかなと思っていましたが、こんな出来事が。ホテルでの仕事でビジネス利用のお客様に「この近くに10分程度で観光できる場所はないか」と聞かれました。有名な神社をおすすめした後、お客様はお礼を言ってくれましたが、あまり満足されていない印象を受けました。今思うと地元の人だからこそ知る場所を訪れたかったのではないかなと思います。少しでもわたしが福岡の深い部分まで知っていれば、お客様も福岡好きにすることができたのかもしれない。

今回の取材で福岡には歴史がたくさんあり、すぐ身近に存在しているのに、認知が低いことを知りました。身近な歴史や文化を知ることによって、福岡をもっと好きになり、愛着も増すはず。真の福岡市民は、ディープなことでも知っていてこそ！真の福岡市民になるべく、すぐ近くにある歴史に触れてみようと思いました。

【身近な文化の発信チーム】

はるこ(社会人)・OKAWAR IKUN(社会人)・エポニーヌ(大学生)

(取材日:2021年12月6日)